

令和4年度 美浜町学校再編検討委員会 会議録

開催日 令和4年8月9日（火） 午後1時28分～2時47分

場 所 美浜町役場 3階 大会議室

出席者 委員長 齋藤正吉教育委員会委員
委 員 大井徳男区長会会長
天木隆雄区長会副会長
本多文雄 PTA 連絡協議会会長、布土小学校 PTA 会長
北村美香奥田小学校 PTA 母親代表
石垣由貴子教育委員会委員
川上英雄住民代表
千賀威昌日本福祉大学常務理事
佐治宏昭校長会副会長、河和中学校長（代理出席）
吉川正美上野間小学校長
（欠席：伊藤拓道住民代表）

専門アドバイザー

名古屋市立大学教授 鈴木賢一

事務局 伊藤守教育長

夏目勉教育部長

近藤淳広学校教育課長

谷川眞紀学校教育係長

（欠席：竹内稔博学校教育課指導主事）

協議事項等 別紙会議次第のとおり

開会 午後1時28分

1 あいさつ

伊藤教育長：学校再編に関し、第1段階として、4月に河和南部小学校と河和小学校が統合した。スクールバスでの登下校の安全確保などの心配あったが、大きな問題もなく1学期無事終了した。第2段階として、小

中一貫校に向けて様々な事に少しずつ取り組んでいる。建設候補地については、学校教育課だけでなく庁内関係各課の職員も含めた学校再編推進委員会を設け、いくつかの建設候補地のメリット・デメリット等を検討している。

学校再編の検討が始まった背景は、今後急激な児童生徒数の減少が見込まれるために、より良い教育環境を考えたいことだと認識している。4月より着任したが、学校再編する方向で動き出しているという認識でいる。保護者や地域の方との合意形成を図りながら、魅力ある学校づくりを行っていききたい。

今年度から委員をお願いする名古屋市立大学の鈴木先生に今日は講演をしていただく。様々な市町の学校再編に関わっており、経験豊かな先生に参加してもらえ心強くありがたい。

検討委員の皆さんには、今後もご理解ご協力をお願いしたい。

齋藤委員長：今年度最初の委員会開催である。昨年度は河和小と河和南部小との統合については進めたが、小中一貫校の検討については、具体的に進むことができなかった。

令和10年から新しい学校で子供たちが勉強するためには、具体的に検討を進めないと間に合わない段階だと認識している。

今年度は、施設整備のための準備委員会を立ち上げたいと考えている。新しい学校を造るにあたり、6つの地区の地域との繋がりをいか強く持てるかが大事だと考えており、地域との繋がりが持てる学校にしたいと思っている。

2 自己紹介 名簿順に自己紹介

3 議事

(1) 美浜町小中学校再編計画について

近藤課長：人口減少問題、町内の児童生徒の減少が加速化していること。

これに伴い、多様な考えに触れ切磋琢磨する集団教育上の教育の実施ができないだけでなく、学校運営や教育指導に影響が出てきている。このような状況のなかで、中学校での単学級を避けた学校運営をしていかなければと考えている。そこで、児童生徒数の減少に伴う単なる統廃合ではなく、すべての児童生徒が通学する小中一貫校を設置し、美浜の特色を活かした新たな学校教育の創造を目指している。

(2) 小中一貫校ミニ勉強会

講師 名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 鈴木賢一教授

昨年3月に美浜町で講演を行った。この時は美浜町の事情を知らずに自分の話したいことを話したが、本日は美浜町の状況を聞いたのでより具体的な話をしたいと思う。

前回のおさらいを含め今後、どんなスケジュールで誰が何を検討するかについてお話する。

学校建築は特殊な建物だという話をした。義務教育を円滑に全国一律の教育を行う仕組みを支える建築であり、学校は大人の社会の縮小みたいなもので、多機能な機能を持った施設である。多様な子供を受け入れるための子供の施設としての考え方や、地域の中で学校が非常に大事な役割を持っている公共施設であるという話をした。

前回皆さんに問いかけたのは、「学校はこうあるべき」という考え方をこの機会に考え直してもらいたいということ話をした。

学校の先生方の影響はとて大きく、建築分野から言うと環境の変化によって子供の行動や気持ちが変わり、環境によって子供たちの集団学習ではなく、少人数や個別指導など非常に多様化している。

一方で、ICT化が進み画面上での学習が主となり、体を動かして学ぶ場面をバランスよく取り入れてもらいたいと思う。そんな中で、学校が子供にとって嫌な場所になっていると聞く。居心地の良い場所であってほしいと思う。学校はルールがあり集団行動しないとイケないが、少しの工夫で居心地の良い場所になる。居心地のいい場所を作るというのがこれからの課題だと思う。

皆さんが目指している小中一貫校は、議論が始まってから数年しか経過しておらず試行錯誤であることは間違いない。現在、ある市の学校再編に関わっているが、小学校と中学校との文化が違うので学校は統合できないと議論になっている。小中が一緒になる難しさは、小中は6年制と3年制であるべきだという固定観念で長い間過ごしてきているからだと思う。

建築的な話をすれば、木造の学校が復活している。木造の学校は、燃える・腐る・壊れやすいと言われてきたが、手入れすれば木造建築もよいのかと思う。木造だけでなく鉄骨で建設するところもある。これは、子供が減少した時に、将来老人ホームや公民館に利用するために鉄骨にしているところもある。これも議論するところだと思う。

地域との連携では、大阪で不幸な事件あって以来、学校が地域に対し

て不信感を持ち子供を守るために学校閉ざす傾向にあった。

一方で、学校を守ってくれるのは地域の人しかいない。そういう意味で地域との連携を作らないと、その時その時は盛り上がるが学校を長く見守る人がいないのは問題だと思う。

また、学校の先生のための職場づくりも大切である。職員室の在り方、教材づくりや動画が作れるようなスタジオ等、働きやすい先を見据えた発想が必要になってくる。

自分たちの認識している「学校はこうあるべき」という考えが固定化している。新しい学校はこうあるべきという考えではなく、これからは「こんな学校にしたい」と自由な発想が大事という話をした。

そこで今回は、「学校づくりのプロセスを美浜の将来を考える学びの機会と捉えて、みんなで一緒に想いを込めたオーダーメイドの学校を作りませんか」という提案をしたい。美浜オリジナルの学校づくりを追及したほうが良い。学校教育の環境で、一定の規制やルールは必要だが、美浜にとってどんな学校が良いかを追及したらどうかと思う。

令和 10 年開校となると、令和 8、9 年が工事期間になる。令和 5、6、7 年が設計期間になる。今が一番良いタイミングだと思っている。令和 4 年度に基となる考え方をあたため、来年度以降、設計者に画を書いてもらうようにする。

工事着工までの設計の話だが、通常 4 段階で基本構想、基本計画を作り、基本設計、実施設計となる。基本構想は、建物の設計の基となる理念で、どんな学校にしたらいいか考える段階である。基本計画は、その理念を基に条件に沿った大まかな計画を作り、この段階で敷地の確定が必要となる。基本設計に進むと皆さんの意見を取り入れながら具体的に設計し、実施設計は工事に向けた細かい最終段階となる。

基本構想の段階で、どんな学校造るのかという協議をするが、そこで夢を語りませんかというのが私の提案です。色々な立場の人がいると、様々な意見が出る。20 年後に大人になる子供たちにどんな学校を用意するか、美浜町ならではの国際教育やスポーツ、日本福祉大学との連携を考えて学校づくりを行う。

そして、地域が学校を支えるのが重要だという事を「夢づくりワークショップ」で話せばいいと思っている。この話し合いのなかで学校像ができると基本計画に反映できる。敷地の確定での比較検討、学校規模、給食の設備やプール設置、駐車場の確保また内外運動場の確保についても、小中学校が共有できるのか決めていく。

小中一貫教育をしている多くの学校は4、3、2制という学年区分を採用している。この方法を取るならば、教室の配置も学年区分で変化をつけるような配置を考える。また、地域施設としての整備として、学校の中に地域の人々の常駐できる場所が欲しいという話がよく出てくる。学校と地域のつなぎ役のサポーターやコーディネーターが学校の中に常駐若しくは、週に数回来ることで学校が今までとは変わる。これはコミュニティ・スクールという形で動いているところもある。また、災害が起こった時に、避難所としての機能は必須なのであらかじめ考えておく必要がある。

設計段階になったときに、設計業者に力添えをしてもらいたいのが利用者の思いに耳を傾ける設計者を選びたいこと、どんな学校が欲しいか伝えることが大事となる。

プロポーザル方式とした場合、公募の準備から1年くらいかかる。今年度あたりに公募の基本構想作ると、来年のこの時期に設計者が決まっているのが理想的。関係者との対話を繰り返す中で設計内容を合意形成が必要。

廃校後の校舎の利用や、通学路の整備について安全確保をどうするかなど、複数の地域が学校中心にひとつになるので地域の皆さんが子供の見守りなど、さまざまなことを考えないといけない。

地域固有のイベントと学校の関係や、学校環境、通学路環境、登下校見守り、放課後支援、学校の先生に任せるのではなく町全体で子供を育てることも必要である。

設計作業は従来、行政と設計業者が話し合いをしていたが、地域住民などの関係者が一緒にテーブルで話し合いが実施できるといいと思う。

物理的な学校づくりではなく、美浜町の将来に係る大事なプロジェクトなので関係者の方がうまく参加し合意形成する。ある意味大変な作業だが何とか乗り越えていくことで、美浜にとっていいチャンスになるのではないかと考えている。

この話は、この形でやると教育委員会と決めたわけではなく、自分の思いで話したことなのでご了承いただきたい。

質疑応答

川上委員：鉄筋と木造の耐久性や使い勝手など比較するとどちらがいいのか。また、従来は規模拡大だが規模縮小の場合どうしていくのか。

鈴木先生：構造形式の話については、初期コストは鉄筋でも木造でも同じ

だと思う。メンテナンスは鉄筋も必要である。木造は造り方によりメンテナンス方法が変わるので比較ができない。

拡大時期の学校と縮小時期の学校については、昭和 40、50 年頃の学校は上や横に増築できるようにしていた。縮小時期にどうするかについては、空き教室が出てくるときには 1 クラス当たりの人数を減らして使用するか、減築する考え方もある。

川上委員：9 年間の小中一貫のあり方で、子どもの発達段階で 3.3.3 制や 4.3.2 制などどれが理想だと考えるか。

鈴木先生：教育の専門性がないので何とも言えないが、ある外国の話だが、子どもの学力が高いので学校建築が気になり見学に行ったことがある。学校は 1 年生から 9 年生まで一貫で担任が同じ。見守る大人が 9 年間一貫して見ているという良さがあつた。日本の小中一貫校では、上級生が下級生の面倒を見る場面が日常的にあるのが良いと聞いている。両方の特性があると思う。

川上委員：4.3.2 制とか 3.3.3 制の場合でも、学校の中で決まると思うが、今の小中学校と何が違うか考えると、専門性のある担任が中学校でクラス担任がずっと教えるが小学校でもそういう概念で考えるのか。

鈴木先生：建築の立場で考えると、9 年間ずっと同じ教室に通うのは節目がない。4.3.2 制の場合は、低学年用、中学年用、高学年用で同じ学校の中だが雰囲気の違いや場所や教室を作るような環境づくりを建築側立場で造ろうとしている。

近藤課長：ワークショップを 10 月以降実施する場合、どんな方に参加してもらおうと効果的な話し合いができるのか。

鈴木先生：当事者意識を持っている方がいいと思う。積極的に学校教育や学校建設に参加できる方、また、地域の事を熟知している方、地域の事知らない方、大学生や高校生もいいと思う。

近藤課長：日本福祉大学と連携しているが、ワークショップに鈴木先生のお手伝いで日本福祉大学の学生が関わることは可能だろうか。

千賀常務理事：将来教員を目指す学生もいる。また、教員の研究にも繋がり、教員を目指すときに必要な事も学ぶ機会になるであろうと思うので何らかの協力はできるかと思う。

鈴木先生：教員を目指す学生がいるならぜひ参加してもらいたい。若い学生がいると場が和むのでぜひお願いしたい。

4 今後の予定

近藤課長：2学期以降、各小学校 PTA 委員会において、学校再編についての説明をしていく。また、ワークショップは10月以降、月1度のペースで開催する予定である。令和10年目標とすると、現在の小学校3年生以下が対象になるので、低学年や保育所の保護者の方にも参加してもらいたい。また、この検討委員会については、年度内にあと2回ほど実施する予定である。

教育部長：本日先生の話聞いて、ハード面はもちろんソフト面でも決めることが多々あると認識した。町長含めた幹部も学校再編の必要性は認識している。令和10年に向け、よりよい教育環境の充実のための整備を進めたいと思っている。将来、美浜町を背負っていく子供たちのために学校再編を進めていきたいので、皆様のご理解ご協力お願いしたい。

閉会 午後2時47分